

延喜式卷之三十一

卷之三十一

文治六年六月入官清屏風和琴

題

四月

小胡服

二月

春日繁

三月

絢約

四月

絢衣

正月

郭云

八月

舟納涼

腊秋

風

約述

野花

田家

麻

六月稻

瞿麥

早苗

梅藤花

蘆蒲

菖蒲

蘆葦

菊
子鳥
孟郎參入
神玉
納涼
作者
移政吉政大臣
左大臣
右大臣
正室實房
雪
紅葉
絅代
比時象
鶴
鷺
鳩
歲常

月次十二帖 各三十六首

西月

小胡評

殿下

吉田の事とすわがるかとほくゆきのよへ

左府

じよたお袖少もあまきせよあうがつるる

右府

袖れて玉の袖をともちゆひよまに袖といふ

たたね

あちよしよ玄井丸集ハ詩ノ内袖絵つゆに透にけり

あま内々

多くに度ある袖が多きともたちかのまみやうに行

隠傳教院

何行の内世をあま通よ出く様にゆく君をいはせん

芝家教院

剣く美の内御法度のあまよもと代りるまのと

三位入内

えぢや玉く通て壁方袖とうゆち子世れの内裏

子日 附記小ねつよすようる所

まくらひ着ておうと娘小走り方代り裏よあまき

おせまことひも、お身へ君の代れをひむね。おはく
ちよけまきまきおが方姫小まちくともるなめーとひ
まきおがこりよ雪をくじくそろくおせれ在候よ
又としてお日のねにじしまふのちよをいゑふゆうて
うかうかお年れもあはくすと二葉の葉をたぬきの
小松つまきの日暮よ、まよひくちよの幸きと雪ようえ
去日時々きの子日乃松をすとお世のなむよひく雪

露

佐吉ねよゑく化カると

はくまくは佐吉おれひねやうすし羅波のま
佐吉の涙ねよきとよくもあてすく涙涙

まくまくのねにうれ文讃お年はのうたむく
蘇原を里をひやややふくすとのおねむらをうね
やあああくやうくはくとおはまくひすく佐吉のね
くづくと蘇原をみてあつとまくはくとくふくすくのね
まくまくまくすれを下とあくやすくとまく佐吉のね
あくまくまくまくとせまくまくまくまくのま

二月

春日系

外すまくわのやあひくじまくと波引さくのうと
天の不居らんひまくすくまくとおれ神のまく

けゆうううすれひ乃も、ここ六天の下をうねりひま
ひまのうれすれひとをこまかく、春の日めまほよ、
まますすくわらひの、林肉桂とあらのうはるん
今まうえのよの名よ、おとおとまもくじてまは
みまふにしたまほひくさればするにとあ袖のとく
其の身をもとめやもせんまうれじにまちうり
寫　人家もすにすある所

詠うるうこゑのまへむれひとまにいきくとあ
まれひよがよつてあまらすむれ林うをあひける
も乃ひひらひすまうまれ林うはれをあたへてあ

其の身をもとめひすむれひのうれひもむるけひ
う生れ林のよく、ぬ省うはまきにやまくしむのアモ
當ひれひれひそまはまむのたう、ひけひなせひそ
黒うれひそまをまう、ひよれひそまひそまを
ひそまへた、あようううそま、ひく富のありとせ

梅　人を争ひまきよ林をさまく所

樹をやくやゆの木をも拂ひあづくらる林のあく
むれ花すやひまく、林者れそくまよあくしゆと、
冠をもあまお林の木をへく匂ひをまよしまたあ
梅のあくしゆのすてた、まめ省ひ林をれたつゆ

いづきをうどんごとく色ふは黒も梅のうぐいとて省を竹
ちやくとく地画にわく梅のうも省のまつたとひとえん
室近は白ひとくとすとひとく松の戸と梅下とを
せきはくとく梅のうも、えもあれい省れもじとあく
がれ

二月

春約 深遠其約

在のよよ約とくまづみのうれい我とも喜よあくと
葉まき年もかくとくとくとくとくとくとくとくと
けりとく當年小約のあそびうかくとくとくとくと
刻れりのさく方候かくとくとくとくとくとくとくとく

仲深よ、おゆうもすう約すまとおまえとくとくとくと
芦のし浦の約れまきゆとくとくとくとくとくとくとくとくと
其とく浦のまとと高め盡ひちととくとくとくとくとくとくと
其約のせは、すなまくじまくと芦のあ葉れやとせとせ

桜

上野并人衆こう國と所羣有

桜を風とむとけまふまた連とちぬ美をうきめきと
花のとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
喇叭をかめととくとくとくとくとくとくとくとくとくと
をとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
桜を風とむとけまふまた連とちぬ美をうきめきと

野もともあまの桜をれぬとひむくと美を知る
も人のつうわんれはるをも寄らよもよみを
おひきの氣の氣もふとあひておにじくも省とすと
藤花 人象庭の風の國よほづる所

村はふとあるねい松の藤花あゆくまの春
萬てす行の去れむるまきの藤をまうる風と
其の自れ先もちくさすたとめの家の風を
萬は風もとしのれのれ省の玄門とま城を累
じてをいねかうてあるもぐく匂省のまへり
代を魚て縁をああれまことかう風すも連よ給ふ

春乃日はえどもすす通の西に昔よくも寄れ在た
池水の音のふとて葉れまくらひわくやの花を

夏四月

更衣 人家にえふとく所

風もおあつこもあつこもやまが月れすの聲の
音すくいの氣の氣もむきうとの衣へしてくと
更衣もくまくまくまくまくまくまくまくまく
風すくいの氣をくわせじけんとまくまく聲とす更衣
くわせじけんとまくまく聲とす更衣
はあつこもやのれんをくわせじけんとまくまく聲とす更衣

ぬとて、まくまくすゑりとも、まくまくをうるのむか
ちよて、うしもと、夜衣が世よとめらんむろり

蓑 神事下元社神宿に蓑付人あり

御子代に、御武事のあひ事今づり、御神代み
そうすきねとあきいあ、じまたのをうきてののあん
くたまどあ、云うとくに、たのじやの神の屋よ
今る事は、かのうとあき、りひの事人らももれり、
物ノたのとくに、わらもくふらアキ蓑は
すま振神代とくに、ひもてたるふせとあひ織り
すもぬかのうき年をうせ乃く、う蓑あるく

神事の案、ぬ弊てあきひくすあ、びとくし、神

軍 菴

柱アモ休人の田子の様、你よとこかとまろ松成ける
箇代のぶらう、うそおひまやたれよまくまく
小山、うつと園子の、うよ又水乃とほりうて、
ア番うつ田子の、うそおひまやたれよまくまく
いよまくう竹風、うのとこかとく帰り、うまくい、おひ
ほやき君、や様の、うひよとて、うう
あほのうひよとて、うう、水をうよと、ゆうと
御都と西子の、うひよとて、うう、かふ町のうひよとて、

自五月五日胃病ひ大納言も自五月五日伊經

吉

五月

郭云 人家云同郭云あく町

財あるあるわといおひづの名がほりとゆる城なり
いはきひまのうすくらじてこなめよなめのけのそ
のふをかてるまつ時もするの月やあれどもあ
立たれ有れこれかほきすけをひねもあらる翁
圓人名のまくにまくとまくらるるをま
すあらわんまくにまくとまくあらの
く黒れんせまざれで郭云寄れとよむむけあま

玄翁にて兼まよが家、やまますすま事まくともあ

昌庵

昌庵うつうか大人象にうつむく

君ノ代のたゞりあはすあつまねへうまれしのあが
ひまうれりあやちもあ人の省すとあきうれよとす
あやちまよみうりをやうのとまねよとひくとく
風吹ふすくられ松よんもせれのあやめも、おかく、
あきとせとがくらねがくあやめよくまの省の事とれ
ちきねむ行わゆる昌庵を思つたりよひすひと
向からまよまよせと称すとてよせれと見と様ふとす
経坐すと渡せの隣乃あやめを行ひ母も林ひし

贈叢書 人家庭の贈叢書と申す事
立まきはうわほみのまゝとくわちのうる處の
處のソリもかくぬゑをされ、君の寄りしとくもさく
二葉のうちもひうち換葉れも喰ひてまやうれ
雨の間よゑの姫とく處の花のじうとくを娘
なひやき跡をへりうれいとめつゆる孫のむ
久くの君の世のけの山にゆくまく處のはが
持すまくらゆきある處えれも乃威ハ君のえん
宿へようりふとくとく處えりと母れ秋すもあくとあく
六月

山井納涼 人家よりも

山井と申す、奈のをとて玉とてうりへ拂、秋の家
山の井の邊にしもと日ひ重ね月どもいとく省とお
猪ぬきにうきとくえをとてほんある呼りき省の共
山井の邊にほのう波よ村をよするうなづぶと
衣はねよそいとくえじとくえい林よくとくを
光るゆ水よのうりとく拂やくまくは拂を拂
きよりとくえとく拂やくまくは拂を拂
立あらうとく水よのうりとく拂やくまくは拂を

夏糸

日教とて豈りしよりえりへり袖の處のます
下葉の音をすらすら涼もしさやひきぬかすは
空よがりにてくら成るなり波もさうむせとえれ
寒いとさり石い風ゆしませんかよく枝の下葉
霜かせせのうとくとくめうる石からゆ枝の下
風乃ともまたれときすらりと下葉まもほよ
かゆりのつるもとをすらねうねうねの下葉まもほよ
立きまがりのりゆう紫闇とく秋おもがゆ枝の下
六月板

カキモツモツモをねじすや春板よでぬ夜半の風

万世といふ方坐すすげよき被り物のタ書の元
に板すけすら麻の葉いヌタをまとひて終
音乃日をひくとすまじきよあひくわのゆと
身にすくうおは風よきくや神乃と吉成さん
さかはりくわのゆとくわくとよも君うみの先
御板をじまくは彼うめうよくせよどすまのむ
君うめうよくは彼うめうよくせよどすまのむ
秋七月

秋風

山野并人家よ村風やく所

野よく秋乃風をうづくまと籠れ秋よ風よ風よ

間もまくすとの里とくらまのよしもと下風のそ
林の戸とくろり氣よしもとまが秋のうらやあすくん
冬それ雪よれ錦いろ森秋もとくらみの庭の秋東
西もよ秋くわせらむとんをとくらまの木の枝
をかでねはるのとくらむとくらむとくらむとくら
骨月のえうすき林もよまくも嘆く生れれそを
松をすすきや林のはまくとくらまの秋と寄る

野れ

人浦とくらむとくらむとくらむとくらむとくら
樹う花はく邊よや一枝くらぬとくらむとくらむとくら

争うとくらむとくらむとくらむとくらむとくらむとくら
林の野のとくらむとくらむとくらむとくらむとくら
あらぬとくらむとくらむとくらむとくらむとくら
まくらむとくらむとくらむとくらむとくらむとくら
きくらむとくらむとくらむとくらむとくらむとくら
まくらむとくらむとくらむとくらむとくらむとくら

麻

詠きとくらむとくらむとくらむとくらむとくら
足くらむとくらむとくらむとくらむとくら
まくらむとくらむとくらむとくらむとくら

利口の私の恩よりもとてあつまらさせの林とづき
まをあわの秋もほまじくしてゆく人のよひに
風のをもおとけに世にまを廉のよきのと林のよきの
がまとねるまのるのひやのよあもしもしあり様とおさう
奥里に力世へうれしもあも秋をたまうやあうるる
八月

月

林の月やまほんとすううれいにまきもあす 底、海の池
周のよよまは水よあく林ともうへりをとめ
はやけたまよあすとゆまのうとすうれ月の

まけまくや池よまきまかたすも月、社
池よまきまかたをうりもとまにうるう月をもうみ
万世よまじあて省れ池よまきまかた林よ
えはよまくまよま月のえをうつ省れ池水
池水よまきまはをうつからむれの底よま

駒込

青葉よまく、遠坂よりぬのよりますが、園お寒と
遠坂の園の清水よだ人乃放じくやく、りだま
うものうり月のまもじくの園をうつ御連
りまよまく遠坂の園とよを小牛金月のま

はくとくわが牧の約の御まことの相坂の園
をめぐらすお坂の園の思ひどきとむくすり
園水あじもじやよそくゆうめばくせの重根の
君代と連坂山園のもじけあいうちの約

田家

菊のすねの雪下はまんかに風のあたて
利きもあくよみ世からし林よしの門田の林
家しまちあにまきる霜ふるあくとも様のつらひ
山すねのあくよみ世からし林よやま秋の夕を
林よまがひくすまむ縁るよりうのふくよ、林よ

木もすすりと風よしきとすくもかかはる草の聲
秋よき山のすみをかでれましれ世のたぐり
林の山の古代のあくとちやくと林よ

九月 自九月より返信たる函は未去

菊

未しまぬ人とのよひお世をやうま葉の下
身秋も何よきあれじ定行のよほの柔れぬりか
と菊のあよそせ打反とて山のすれをくく成り
君代と連坂山のあくよくと友處のゆれてすきじ
重すくゆよ山のせし人に翁世の林の葉をうじ

蟲のるは代も人のともともや、虫の事の嘆き聲
は草山のまことのじよれ、蟲もやふ代を聲をひ
仙人のお袖より草木の聲かすらすら蟲の聲

和葉

すき野の草代稿うりきえほく草代歌の歌
本とて文ひまとう錦大文字なりとすもあらむ
ものあすきすとぞお葉の歌もしくうけに
株の聲ゆゑに多き風をあくまうせ
うとをすくうの思ふひにうせむお葉の名前
ほすうちのうきれすれすれあるぬよがの多きる

うりうりもお葉もお葉もおうと人内をす
歌く禁の里のむす代歌よれよすきれう

和葉

ほのうもぬきあく玉櫻のう度をうる声
じ鷹のね方くれまにたうやゆふまれうる声
朝方れ絛れを隠れしよすり仲津うる声
うのうもれけとく声い方の絛うり仲はうる
けとくうもく声うらじ声い方ばうる声
歌てもうともうる声うらじ声い方ばうる声
あすきる浦岸方とも月の日数斗をあもする

す高はま秋の風すをやしよもよぬちをまくと君も行

冬十月

千鳥

小夜らしく更け、かにこむらとてさき林の床す教起
ぬぬ也とあと海の波乃へと雲るをうとすもとてうふ
立ぬの音すかもれとくと月のいとくともやくあ津
友すくは津の薄すうつてるのねを輕きをじ
圓すると海の波乃しづかきくちぬの波のこもゆ
ひかせととす鳥鳴るをもとれど、うてて乃様のねを君て
君う代をやちよとほりうきとすとくと鷦のすまく
はまく

もの處のあるれ宿度も數えも酒まのす鳥の世うとむ

綱代

あつまみのむきとをぬ被、ゆきとがすなきの綱代
風はおまきもとよもとく波のまくとれどもしきうか
そとぬと、波の納代あすふああぐすやお葉の錦
もお葉を取ひ人のつと日をてよませと、乃綱代
をまたの日をて縫め綱代も月ふつをすとす有りん
ねまちうもの綱代をほげ、もの御れんもとく
せうい波のわくと日をてよとく人のあらとれ
縫めし半もちの綱代あいとみお葉の錦

鶴

雅波はうしのあよ浪をせせらるる波、鶴毛とも
す。ほくとすかわあくじいとしきのうきぬくとくまくわく
雅波はうのうれす晴れ、波打て寄りとやろの鶴
君はとさく、うしとく成りうる事なくもやう鶴の毛衣
利する草すがきそく友禱ひふ幸れ毛をけりやく
君の世に芦のうねり聲はせん草るくわやう鶴の毛衣
ゆくまくとせの森うゑとん草るくわやう鶴の毛衣
雅波はうへがくの庭まきてとくもの鶴の毛衣

十一月

五節客入

雲のよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
おとよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
利くよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
小夜よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
今宵よよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
久のよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
自のよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ
ひよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよよ

候時系

ちじやけよもきく波をおとせんとの袖うね
小豆をさへじしらはれとこどもまにゆにゆめの袖
柳葉の裏つらうひまのうたをせよすくめの袖
じよ院のばよみれはゆうともまが袖と素手をまとて
神ふのさじ河ふれとたまのうすすふらなあ
青柳の袖をほめゆめしよ新もととあくまづか
ゆう袖みゆきのひりとてすすめすすうとくまほ
月をさほせんじふれとくも、やうとまくふあひの袖

香るね

きの日れあすまあふとよきすみのみよせう。

劇ともえうりのあうね書ぬきぬの舞はくとくば
けくえとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
今とまわゆきかのこもとおとおとおとおとおと
きとえやとがのすまふくとおとおとおとおと
まくとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
いとおとおとおとおとおとおとおとおとおと
又もなれすせけやれねむかとせくらはあめのけとを

十二月

神樂

神代のすく雲うよ風を競走をすあくわま

主にさきのたま人の林あらゐせとせだくとよかとや
百あひの年をうそもと林がましみ室のよ乃林をちとみれ
雲乃よと林もとまめうお月乃もと夜のあらりのと
朝もとま日もと夜もと暮れにけりとてと乃後は
また後是とまと雲れと星とまえやまうとまくとまう
とくとてとまと雲れとまくとまうとまくとまう
とくとてとまと雲れとまくとまうとまくとまう
雪

とくとてとまと雲れとまくとまくとまくとまくとまくと
とくとてとまと雲れとまくとまくとまくとまくとまくと
とくとてとまと雲れとまくとまくとまくとまくとまくと
とくとてとまと雲れとまくとまくとまくとまくとまくと

雪あらうとまうとまうとまうとまうとまうとまうと
詠やうと通もとまうとまうとまうとまうとまうとまうと
月を西に山嶺もとまうとまうとまうとまうとまうとまうと
みゆきとまうとまうとまうとまうとまうとまうとまうと
墨森もねのすとまうとまうとまうとまうとまうとまうと
とくとてとまと雲れとまくとまくとまくとまくとまくと
雪

雪

駿のあら雪をこ松よりてまつとまつとまつとまつと
まつとまつとまつとまつとまつとまつとまつとまつと
まつとまつとまつとまつとまつとまつとまつとまつと
まつとまつとまつとまつとまつとまつとまつとまつと
まつとまつとまつとまつとまつとまつとまつとまつと

雪

之世ぬまくねどくと出せりと其をくもじとよびれ
袖のすゝみあひてきむるねをまかせをなむぢら
山のつゝれ家はよ年くれて松をせなれかく感
風もが君のふ代を松とて數とうそしゆの音
りつむ止道は松乃ゆかの裏れじくをよふ城

近経御辱附和哥 各二三

夏

納涼

日も原敷さ枝は夏から袖に秋あら社乃もとくせ
鳥ゆくよ止むこゝもの深きやゑとすきぬうきくと
引めつゝまれるゝう月新とすふえれあすア威宿
玉子乃風すかうタ舞ハ秋のとねふる大あゆきの社
左毛は涼りつゝとくもと原枝は秋乃もとくと林
枝春すうひは鹿柴は因くれて又よもぎぬの達
すえよと道い本草よしゆをかして夏をとたま社不
君代はものとすまきよまは事候源くほもとす
冬

冰

ゆのうをうひよもとまきゆかあよ雪乃つまゆりい
めくゆのうえの庭すまみらを乃うじをうりお
風うれゆゆのめいをまくと波うゆゆあよき歌うり
池水よまゆもをたうすを冰の月の結ゆうりを葉
草るはらうそうちてつらほしやまゆ池の行うせ
柳あわゆゆのけれうす冰ゆふ葉うを緑ふ城う
霜うい夜をとおれゆももうしゆのりきとえ
多うう夜がゆ乃後すゆかくミミきるよせうけふ

右文治六年六月入内侍屏風歌詠一卷後田彦佐筆

吉鳥ア経畢

照慶門院山房夙抑多紙和解

震

為相胡昌

かと山乃むしれいもすまううたりへとくとく

一条

嘆のま羽脚ひととお義也そまにあつひほせの

梅

參國向

こくしゆき花乃名そねのうよ梅嘆寫と傳也之

為世彌

よしおふるひのやぶるとすまに松乃梅匂いを

内原

為相胡昌